

福岡市

野多目前田遺跡 調査概報

福岡市埋蔵文化財調査報告書第85集

1 9 8 2

福岡市教育委員会

福岡市

野多目前田遺跡

調査概報

福岡市埋蔵文化財調査報告書第85集



1 9 8 2

福岡市教育委員会



序 文

本市周辺部の人口増は、南区においても例外ではありません。

今回の調査は、人口増に伴なう児童生徒の急増に対処するため、昭和56年4月に新設された市立野多目小学校の校舎敷地内に所在する遺跡について、教育委員会が調査主体となり実施したものであります。

本書が市民各位の文化財保護及び学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。

なお、調査に際しまして、有益な指導・助言をいただきました調査指導員の先生方をはじめ、調査の意義をよく理解し、心から協力をいただいた多くの方々に對しまして感謝申し上げます。

昭和57年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 津 茂 美



内行花纹镜片

野多目前田遺跡 調査概報

本文目次

第1章 序説	4
1.はじめ	4
2.野多目前田遺跡の位置と周辺の遺跡	7
第2章. 調査概要	9
1.調査概要	9
2.第I調査区の調査	9
3.第II~IV調査区の調査	27
第3章 まとめ	31

挿図目次

Fig. 1 野多目前田遺跡周辺航空写真	3
Fig. 2 野多目前田遺跡と周辺の遺跡	5
Fig. 3 野多目前田遺跡位置図	6
Fig. 4 野多目拈渡遺跡貯蔵穴群	7
Fig. 5 野多目拈渡遺跡第10号貯蔵穴	7
Fig. 6 野多目古墳群遠景(本遺跡から)	8
Fig. 7 野多目拈渡遺跡倉庫群	8
Fig. 8 野多目拈渡遺跡第6号倉庫	8
Fig. 9 第I調査区全景	9
Fig. 10 出土青磁	10
Fig. 11 第1号溝・第3溜状遺構(北から)	10
Fig. 12 第2号溝岸柵(西から)	11
Fig. 13 第3号溝断面(北から)	12
Fig. 14 出土須恵器	12
Fig. 15 出上台付須恵器环	12
Fig. 16 高台付土器塊	13

Fig.17	高台付内黒焼	13
Fig.18	土師器焼	13
Fig.19	軒丸、軒平瓦	13
Fig.20	丸瓦、平瓦	13
Fig.21	黒色粘質土屑遺物出土状態	14
Fig.22	黒色粘質土遺物出土状態	15
Fig.23	ミニチュア土器	15
Fig.24	ミニチュア土器（2）	16
Fig.25	小形の壺（1）	16
Fig.26	小形の壺（2）	16
Fig.27	土製模造鏡	17
Fig.28	祭址遺物実測図	17
Fig.29	上製勾玉、十玉	17
Fig.30	有孔円盤	17
Fig.31	縄文式土器	18
Fig.32	墨書き土器	18
Fig.33	内行花文鏡鏡面	18
Fig.34	内行花文鏡文様帶	18
Fig.35	内行花文鏡実測図	19
Fig.36	文鏡？	20
Fig.37	第2号溜状遺構	20
Fig.38	土師器坏	20
Fig.39	青磁环	21
Fig.40	土管出土状態	21
Fig.41	土管	21
Fig.42	段落ち部柵	22
Fig.43	第5号溝及び堰	23
Fig.44	堰の木組状態	23
Fig.45	第1区出土遺物実測図	24
Fig.46	第5層出土遺物	25
Fig.47	第6層出土遺物	25
Fig.48	現代用水、畦畔、肥料溜	26

Fig.49	版及び水口（西から）	26
Fig.50	板木組み状態	26
Fig.51	段落ち部の現代水田瓦排水施設	27
Fig.52	瓦排水施設断面	27
Fig.53	瓦排水施設の排水口	27
Fig.54	第II調査区全景	28
Fig.55	第4号溝	28
Fig.56	第IV調査区	29
Fig.57	第IV調査区X溜状遺構	30
Fig.58	第IV調査区溜状遺構板材出土状態	30

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会施設部管理課が計画した市立野多目小学校建設に伴なう事前調査として、福岡市教育委員会文化課が1970年11月～1980年5月に行なった福岡市南区野多目に所在する野多目前田遺跡の調査概報である。
2. 本書の執筆編集は、山口謙治が行った。
3. 本書に使用した図の作成及び製図は、山口、原俊一、浜石正子が行った。
4. 本書に使用した写真は、遺物を白石公高が行い他は山口・原が行った。



Fig. 1 野多目前田遺跡周辺航空写真

第1章 序 説

1. はじめに

1978年、南区の人口増に伴い、児童・生徒数が急増したため、1981年開校予定で野多目小学校の建設が計画された。これに伴い福岡市教育委員会管理課から文化課に、埋蔵文化財の有無について依頼があった。これを受け、柳田、二宮が現地踏査及び試掘を行った結果、満などの遺構や古代から中世にかけての遺物が検出され、集落址であることが予想された。この結果をもとにし、文化課と管理課と協議を行い、校舎敷地、取付け道路擁壁部について、発掘調査を行い記録を残すことになった。

調査は、1979年11月から1980年6月までの約7ヶ月間にわたって実施した。調査にあたっては、教育委員会管理課、土地開発公社造成課をはじめ地元各位の多大なる協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。

調査関係者

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

文化部長 志鶴幸弘

文化課埋蔵文化財第一係長 三宅安吉 文化課埋蔵文化財第二係長 柳田純孝

庶務・会計 古藤国生

発掘調査 山口譲治

試掘 柳田純孝 二宮忠司

調査補助員

原俊一（現宗像市教育委員会） 浜石正子 馬渡圭子

作業員

安藤昇 上野恵 大城松徳 芹川英憲 角守 中川俊雄 中村弘志 野崎国弘 藤野隆雄
松尾憲市 本多俊郎 篠原賢治 本松又五郎 井上喜美代 江島光子 勝野美智子 金子
フクミ 酒見武代 宿久光枝 篠原寿恵代 篠塚ひろ子 澄川アキヨ 関サヨ 高日久子
恒君子 立花恵美子 手島かおる 手島ミサエ 藤アイ子 藤キクエ 藤シズカ 中川澄
江 永富澄江 西川シズ子 藤野信子 八尋千代 山下智子 山本ミツエ 結城ツヤ

整理補助

友田好子 川原靖子 茅島洋子 井本賀都子 御手洗史子

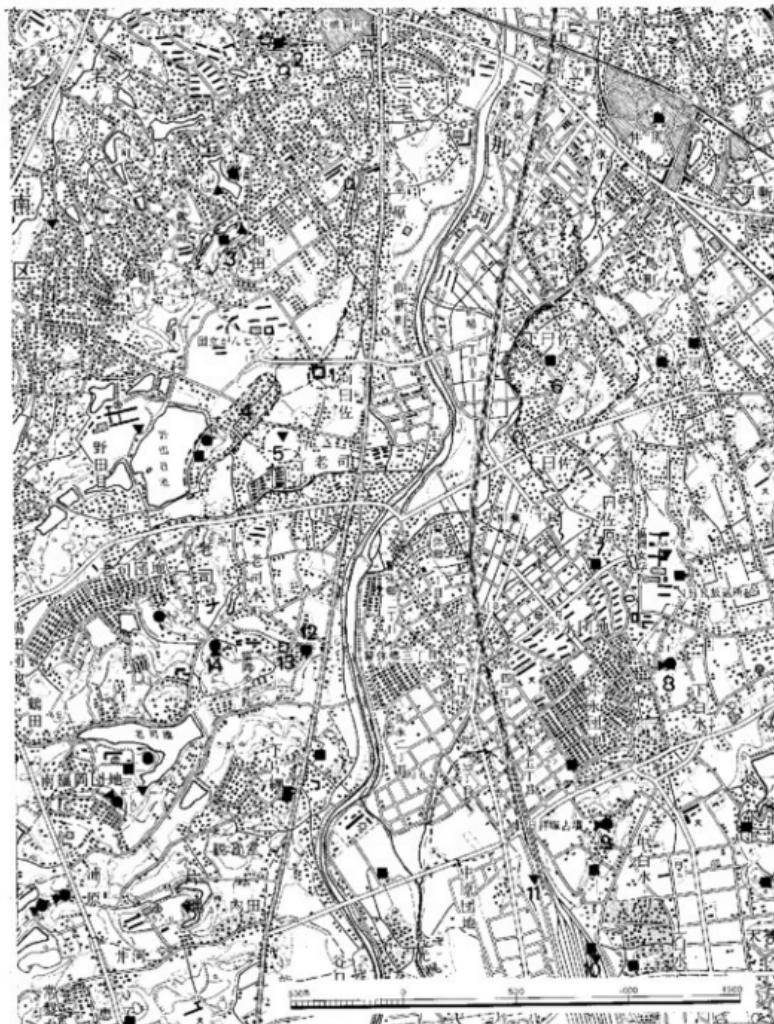


Fig. 2 野多目前田遺跡と周辺の遺跡

- | | | | |
|------------|-------------|-----------|-----------|
| 1. 野多目前田遺跡 | 2. 三宅庵寺 | 3. 和田A遺跡群 | 4. 野多目古墳群 |
| 5. 野多目括渡遺跡 | 6. 月佐遺跡群 | 7. 月佐原遺跡 | 9. 日拝塚古墳 |
| 11. 柏田遺跡 | 12. 老松神社古墳群 | 13. 老司瓦窯址 | 14. 老司古墳 |
| 10. 門田遺跡 | | | |

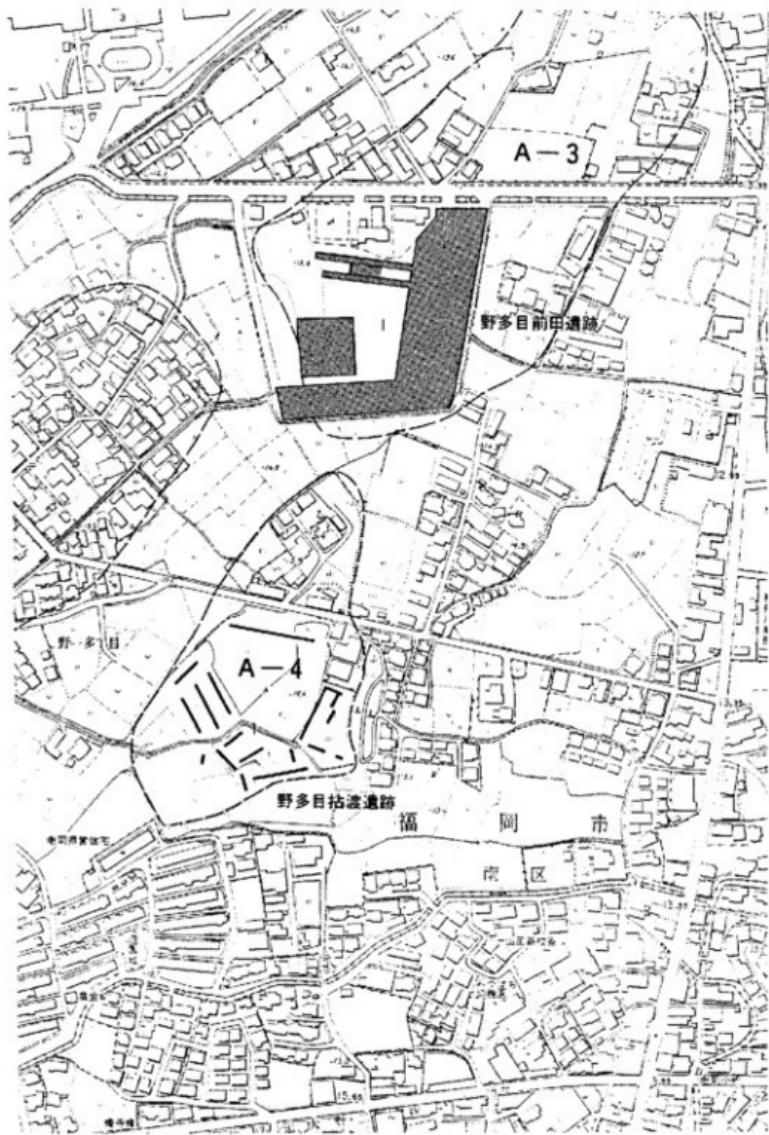


Fig. 3 野多目前田遺跡位置図 (1 : 5000)

2. 野多目前田遺跡と周辺の遺跡

野多目前田遺跡は、福岡市の南部で福岡市南区大字野多目字前田・古屋敷に位置している。同遺跡の東500mには北流する那珂川があり、西500mには野多目池がある。地形的には那珂川町南畠を源とする那珂川の河岸段丘上に位置している。

この段丘の地山は八女粘土層で、上に鳥栖・新期上部ローム層をのせているが、削平を受けている。調査までは、水田で、標高13.3~14.8mである。

野多目前田遺跡をとりまく歴史的環境としては、旧石器時代から始まっている。

旧石器時代の遺物は、同じ段丘上にのる野多目古渡遺跡や那珂川の東岸の須珂丘陵上の日佐遺跡でナイフ形石器が、門田遺跡でナイム形石器、細石刃が層位的に出土している。本遺跡では包含層は確認されなかったが、ナイフ形石器・三陵尖頭器が出土した。

縄文時代の遺物は、野多目古渡池畔・老司池池畔で押型文土器が採集されている。中期後半から後期前半にかけての遺跡としては、野多目古渡遺跡や春日市柏田遺跡などがある。

Fig. 4 野多目古渡遺跡貯藏穴群
本遺跡と同一段丘にのる野多目古渡で、運動公園建設に先だって調査を行なった。その結果約60基の貯藏穴が確認され、土器・石器とともに、イチイガシを多量貯藏した状態のものも検出された。本遺跡では、遺構・包含層とも確認されなかったが、滑石を含む同時期の土器が出土している。また野多目古渡池畔でも土器が採集されているところから、縄文時代中期後半から後期前半にかけて、野多目に一大集落を形成していたと考えられる (Fig. 4・5)

弥生時代の遺跡としては、中期の甕棺墓地である南大橋遺跡があり、消滅しているが和田遺跡も甕棺墓があったと伝えられている。那珂川の東の須珂丘陵には、須珂岡本遺跡をはじめ大遺跡が集中している。本遺跡では磨滅している土器片が出土したが、遺構・包含層は確認できなかった。野多目古渡遺跡で夜臼式土器期の溝が確認されているところから、野多目地区は弥生時代には、水稻耕作の場とし



Fig. 5 野多目古渡遺跡第10号貯藏穴



Fig. 6 野多目古墳群遠景(本遺跡から)



Fig. 7 野多目括渡遺跡倉庫群

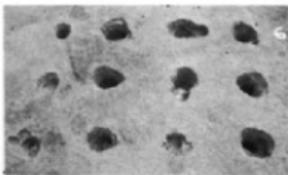


Fig. 8 野多目括渡遺跡第6号倉庫

て使われた可能性が考えられる。

古墳時代に入ると、本遺跡の南西600mに野多目古墳群があり、南々西1200mに老司古墳（前方後円墳）・卯内尺古墳群があり、南には老松神社古墳群がある。本遺跡では、5世紀前半期の土器や土製品が出土しているほか、須恵器も出土している。また弥生時代終末から古墳時代のものと考えられる内行花文鏡が出土している所から、墓地・集落址が本遺跡及び周辺地区にあったと考えられます。

古代になると、北800mの三宅小学校横に筑紫宮家のものといわれる楚石があり、筑紫宮家跡と考えられ、八ノ坪・四ノ坪などの小字があるところから条里もひかれていたと思われます。また北1200mには、三宅庵寺や三宅瓦窯址・三宅岩野瓦窯址が、南1200mには、老司瓦窯址がある。野多目括渡遺跡では約20棟の倉庫群が確認され、本遺跡でも須恵器をはじめとする同時代の遺物が大量に出土しているところから、集落址と考えられる (Fig. 7・8)。

中世以降の遺物は、本遺跡をはじめ周辺に多数分布しているところから、現在まで、綿々と人の生活が続いていると推定できます。

第2章 調査概要

1. 調査概要

調査は、開校が1981年4月となっているため可能な限り建設工事工程に合せる形で実施した。従って擁壁工事にかかる分から着手した。調査対象地は 17300m^2 で、台形を呈しており、調査区を便宜上、東縁辺を第I調査区、南縁辺を第II調査区、西縁辺を第III調査区、北縁辺を第IV調査区として調査を実施した。

第I調査区は、擁壁及び取付け道路部にあたるところに巾 20m の調査区を設定し、さらに校舎建設地分を巾 40m で拡長し、 5925m^2 の調査を行なった。

第II調査区については、まず擁壁部の 10m について調査を行ない校舎建設地分を拡張し、 1150m^2 について調査を実施した。

第III調査区については、巾 2m 、長さ 8m のトレンチ調査を行なった。

第IV調査区については、巾 1.5m 、長さ 4.5m のトレンチを設定し、溜状の遺構部分を拡張して調査を行なった。

2. 第I調査区の調査



Fig. 9 第I調査区全景

第Ⅰ調査区は、調査対象地の東縁辺部で、段落ち部にあたる。土層の層順は、上から現代水稻耕土（第1層）、黄褐色床土（第2・3層）褐色粘土層（第4層）、褐色粗砂層（第5層）、暗灰～灰白色シルト～粗砂層（第6層）、鳥栖ローム、八女粘土層となっている。

遺構は、第4層から切り込まれたもの、第6層に切り込まれたもの、鳥栖ロームに切り込まれたものがある。最も古い遺構は、鳥栖ロームに切り込まれたもので、第2、3号溝状遺構などがある。第6層に切り込まれた遺構としては、第1号溝状遺構、第1・2面状遺構などがある。

また、現代（近代？）の水田址も確認された。

各遺構、包含層からは、縄文時代後期前半の土器片、石鏃、弥生時代の土器片、古墳時代の須恵器、土師器、古代の須恵器・黒色土器などの土師質土器、中世の土師質土器、青白磁などが出土した。（Fig.9）

a 第1号溝状遺構

第1号溝状遺構（第1号溝とする）は、台地の段落ち部にあり、巾2.5m、深さ0.5mで、第1調査区を南から北へ横ぎっている。第6層から鳥栖・八女粘土層まで切り込んでいる。出土遺物としては、縄文時代後期の土器片、古墳時代の須恵器、古代の高台付き須恵器碗・土師器杯や龍泉窯の青磁（Fig.10）等がある。なお、各所に水落しのためと考えられる堰があり、調査区の北端では、分水と考えられる堰があり、段落ちとなって滝状（Fig.11）と



Fig.10 出土青磁



Fig.11 第1号溝 第3面状遺構（北から）

なっている。この溜状の遺構（第3号溜状遺構）からは、北宋錢なども出土した。

以上から本遺構は、13・14世紀の水田用の用水路と考えられ、調査対象地外に水田址が考えられる。

b 第2号溝状遺構

第2号溝状遺構（第2号溝とする）は、第1号溝と平行して北流する巾1m前後、深さ50cmの溝で、調査区中央部より南は削平によってなくなっている。北側は、第3号溜状遺構によつて切られているが、第2号溝の護岸と考えられる柵の木杭の基部が残っている（Fig.12）。埋土



Fig.12 第2号溝護岸柵（西から）

は、灰色～褐色粗砂で、高台付の須恵器碗・丸瓦・平瓦などが出土した。

以上から、第2号溝は、奈良時代から平安時代はじめ頃の溝と考えられる。

c 第3号溝状遺構

第3号溝状遺構（第3号溝とする）は、巾10m前後、深さ1m前後で、調査区の南端が巾広く調査区中央にいくに従って狭く、浅くなつて消滅している。埋土は、灰色～褐色の粘質土・シルト・細砂・粗砂の互層からなり、途中、西岸に黒色粘質土を挟んでいる（Fig.13）。

第3号溝からは、上部で13～14世紀の青白磁が出土し、中部から下層にかけては、奈良時代



Fig.13 第3号溝断面（北から）

及びそれ以前の多量の遺物が出土した。

〔出土遺物〕 最も多いのは、須恵器で、高台付の碗が多量に出土した。高台付の須恵器碗は、いずれも灰黒色から灰色を呈し、胎土、焼成とも良い。口径は14cm前後、器壁の厚さ3～5



Fig.14 出土須恵器

mmで、器高は、4.5cm前後のものが多いが、器高が5.5cmをこえるものもある。高台は、0.5cm前

後の高さをもち、底型は8.5cm前後のものが多く底にへら記号のあるものもある(Fig.14)。他に無高台で、口径14cm、器高3.7cm・底径10cmの杯や、小田氏編年の須恵器のIII bに属する杯・杯蓋・台付きの杯なども出土している(Fig.15)。土師質の碗も多く出土している。これらの碗は、口径15cm前後・器高5cm前後、高台の高さ0.4cm前後、底径7cm前後のものが多い(Fig.16)。他に内黒の高台杯碗(Fig.17)、



Fig.15 出土台付須恵器杯



Fig.16 高台付土器器坏

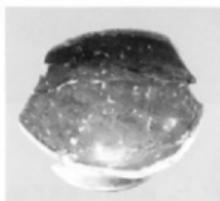


Fig.17 高台付内黒坏



Fig.18 土器器坏

無高台で口径14.8cm、器高6.2cm、底径7.2cmで やや丸底となるもの (Fig.18) や口径11cm、器高3.7cmの無高台の内黒土器などがある。

布目瓦も、丸瓦・平瓦とも多数出土しているが軒丸・軒平瓦はわずかに軒丸1点・軒平2点が出土しているのみである (Fig.19・20)。

黒色粘質土からは、祭壇遺物と考えられるミニチュア土器・土製模造鏡・土製勾玉、土玉・滑石製有孔円盤などが出土地した (Fig.21・22)。

ミニチュア土器は、いずれも手捏で、灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良い。形状は口径3.5cm前後、器高約3cmのぐい飲み形のもの8点、口径6cm前後、器高約4cmで、球形の体部に口縁が少し開くものの5点 (Fig.23・24) などがある。また手捏によって、体部を球形に整形し平坦に短く聞く口縁部をもつ小形丸底状の壺も出土している。



Fig.19 軒丸、軒平瓦

いる。この種の土器は、8点あり灰褐色を呈し (黒斑を有するものもある)、胎土には砂粒を含み堅緻で焼成も良い。手捏整形後ナデ調整を施したものもある。口径8cm前後・器高7cm

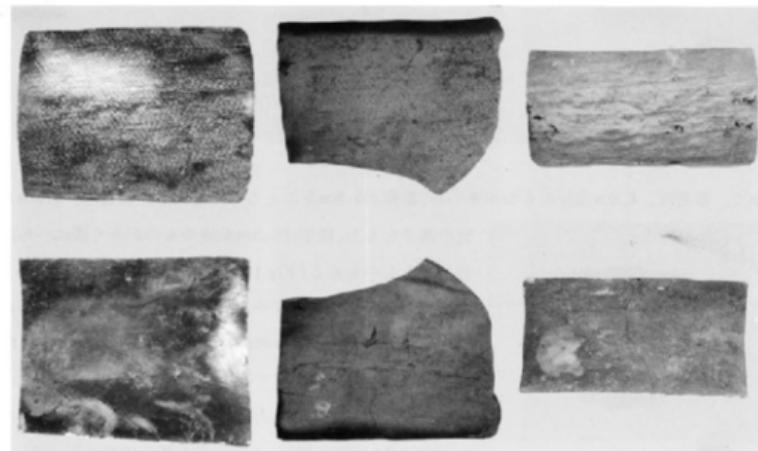


Fig.20 丸瓦、平瓦

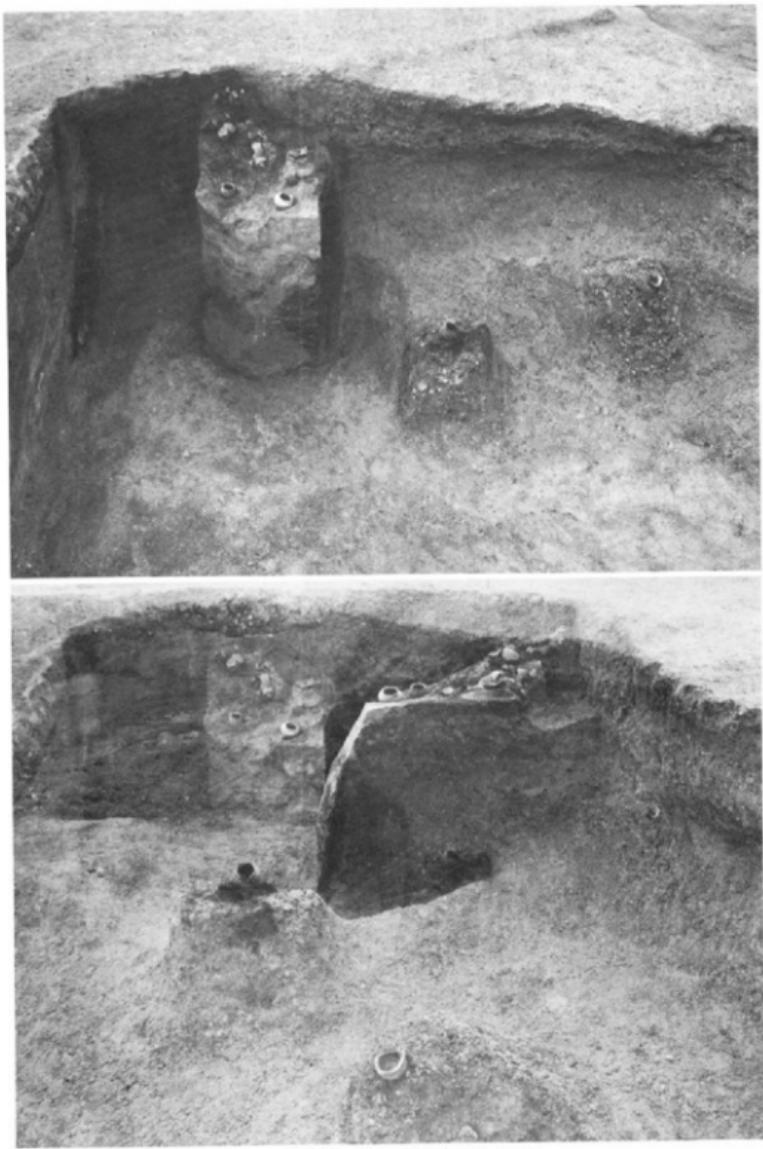


Fig.21 黑色粘質土層遺物出土狀態



Fig.22 黒色粘質土遺物出土状態



Fig.23 ミニチュア土器

前後である（Fig.25・26）

土製模造鏡は、いずれも手捏によってほぼ円形の扁平に整形し、中央部をつまみ上げ紐部をつくり出している。灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良い。鏡面は凸レンズ状になるもの4点・凹レンズ状になるもの2点で、凹レンズ状になるものは紐部の穿孔がみら

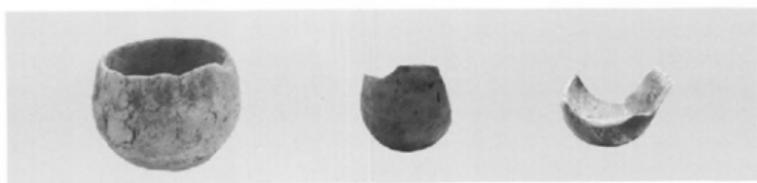


Fig.24 ニュニア土器（2）



Fig.25 小形の壺（1）

れない（Fig.27・28）

土製勾玉は3点あり、いずれも灰褐色～灰色を呈し、胎土には砂粒を含んでおり、焼成も良

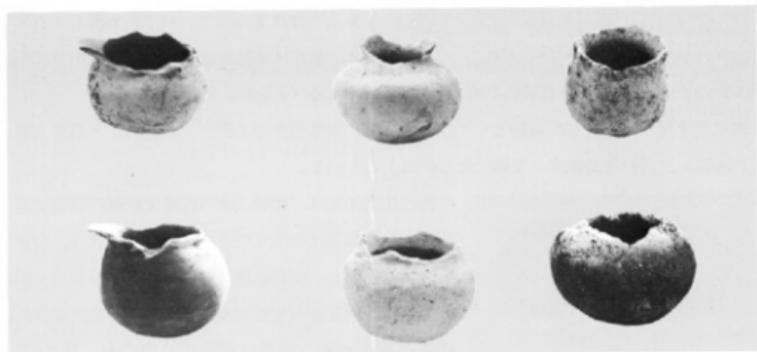


Fig.26 小形の壺（2）

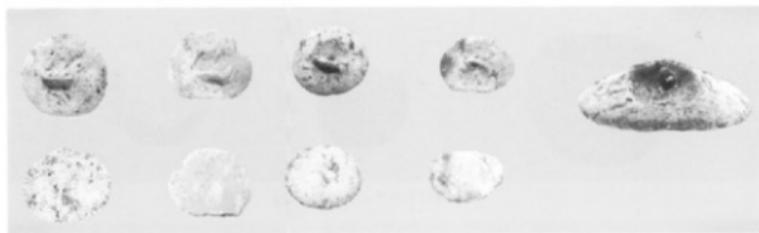


Fig. 27 土製模造鏡

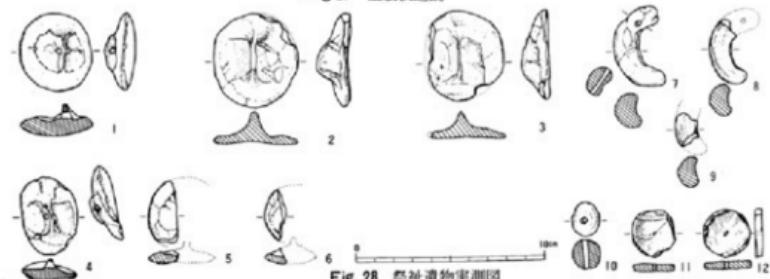


Fig. 28 祭社遺物実測図

い。1点が完形品で、背部は丸く、内側は抉れており穿孔は両側から棒状工具で行なわれている (Fig. 28・29)。

土玉は、灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含み焼成も良い。径1.8cmの球形で、穿孔は表裏から行なわれている (Fig. 28・29)。

有孔円盤は2点あり、いずれも滑石片岩製である。敲打・剝離後研磨を加えほぼ円形に仕上げている。径2.4cm、穿孔部径0.1cm、厚さ0.35cmである (Fig. 28・30)。

他に最下層から出土した遺物としては、縄文時代後期前半の土器片 (Fig. 31)・墨書き器片 (Fig. 32)・内行花文鏡片・文鏡?などが出土している。

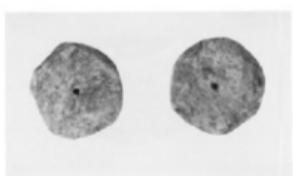


Fig. 29 土製勾玉、土玉

内行花文鏡片は、径18.1cmの四葉文座紐内行花文鏡で、約4分の1部は欠けている。良質の白銅質で、白緑色～暗緑色を呈し、残存状態は良いが、気泡が多く、割れた部分には磨痕がみられ、表裏とも鋸を落したようなな凹みがみられる。外区は平縁で巾25.5mm、厚さ4.5mm (内区に向って少し厚くなっている)。中区は斜角雷文



Fig. 30 有孔円盤



Fig. 31 縄文式土器

帶を櫛歯文帯が挟む構成になっており、外区と中区の境が一番うすく3.4mmで、内区に向って厚くなっている。内区は八弧文・素文帯



Fig. 32 墨書き土器

・櫛歯文帯四葉紐座からなり、八弧文の間には鸟・山が交互にみられ、四葉間に「天」の銘らしきものがみられる（口絵・Fig.33～35）。



Fig. 33 内行花文鏡鏡面

文鏡？は、硬砂岩製で研磨によって扁平の円形に仕上げている。

最大径11cm、最大厚2.6cmである（Fig.36）

以上から、第3号溝は、奈良時代の自然流路？（又は溜池？）と考えられ、13・14世紀ころに完全に埋ったといえよう。出土遺物か



Fig. 34 内行花文鏡文様帶

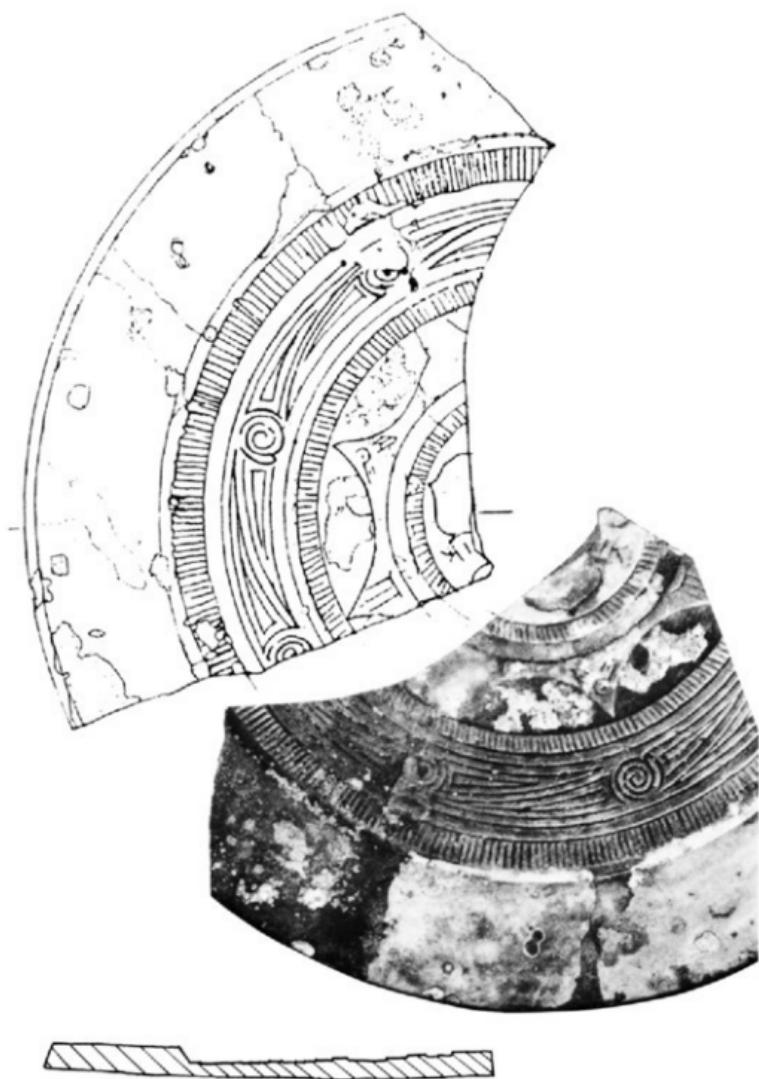


Fig. 35 内行花文鏡実測図（1/1）



Fig. 36 文鏡？

d. 第2号溜状遺構

第1調査区中央部に位置する $2.5m \times 6m$ の不正方形の堅穴遺構である。第1号溝の付設遺構と考えられるところから溜状遺構とした。壁にそって護岸と考えられる杭がある。底面は、深



Fig. 37 第2号溜状遺構

さ $0.9m$ で $2.5m \times 2.8m$ の不正方形の面と底 $2m$ の不正円形の面があり、前者の底面には、円標が敷きつめられている。

また、第2号溜状遺構の東側は段落ち部となっているところから、第1号溝から水を第2号溜状遺構に落して、東側の水田？へ水を流したと考えられる。(Fig.37)



Fig. 38 土師器片

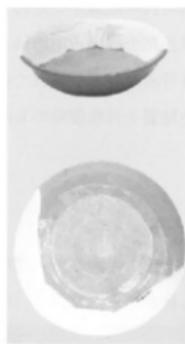


Fig.39 青磁片

出土遺物としては、土師器・青磁・ゲタ・土管・元豊通宝などがある。

土師器は、壊で、糸切り底のものが多く、器面は、ヨコナデ調整がほどこされている。口径8.5cm前後、器高1.5cm前後のものと、口径13cm、器高3cm前後のものがある。いずれも淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含み堅緻で焼成も良い。器表面はナデ調整によって、砂粒はみえない。(Fig.38)。

青磁は、龍泉窯の碗の破片や口径13cm、器高2.7cmの壊などが出土している(Fig.39)。

ゲタは、松?を原材としたもので、長さ15cm、巾5cmで、ゲタの



Fig.40 土管出土状態



Fig.41 土管



Fig.42 段落ち部柵

壁はなかった。

土管は、瓦質で、灰黒色を呈し、胎土も緻密で焼成もよい。長さ42.2cm、径は片方が21cm、片方が17cmで、器壁は1.5cm前後である (Fig.40・41)。

e その他の遺構

第2号溜状遺構の東側は段落ちとなっており、段落ちの壁にそって柵と考えられる杭列がみられた (Fig.42)。

第1号溝を切って、段落ち部に流れこむ巾1.2m、深さ0.4mの第5号溝 (第1号溝との時期差は、出土遺物からほとんどない) には杭を組合せた堰がもうけられているが、削平をうけているため用途は分らない (Fig.43・44)。

f 包含層出土遺物

第5層からは、同安窯・龍泉窯の青磁・糸切り底の土師器壺・土師器碗・滑石製石鍋片・スリ鉢片などが出土した (Fig.46)



Fig.43 第5号溝及び堰

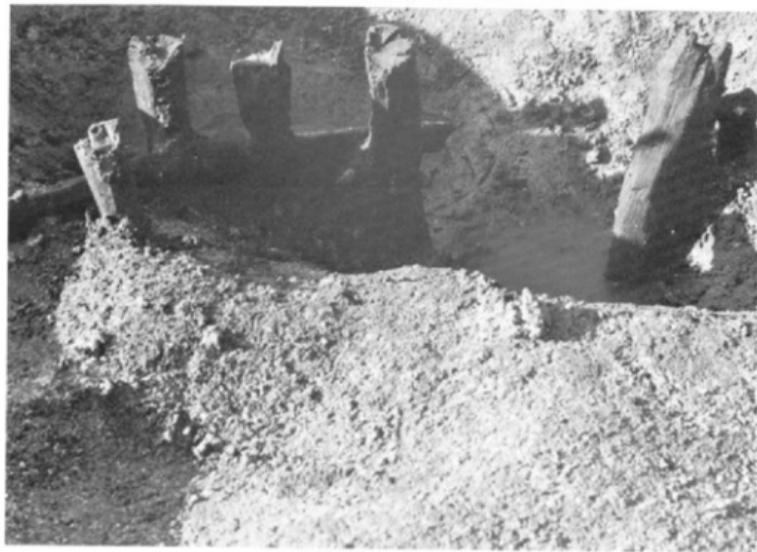


Fig.44 堤の木組状態

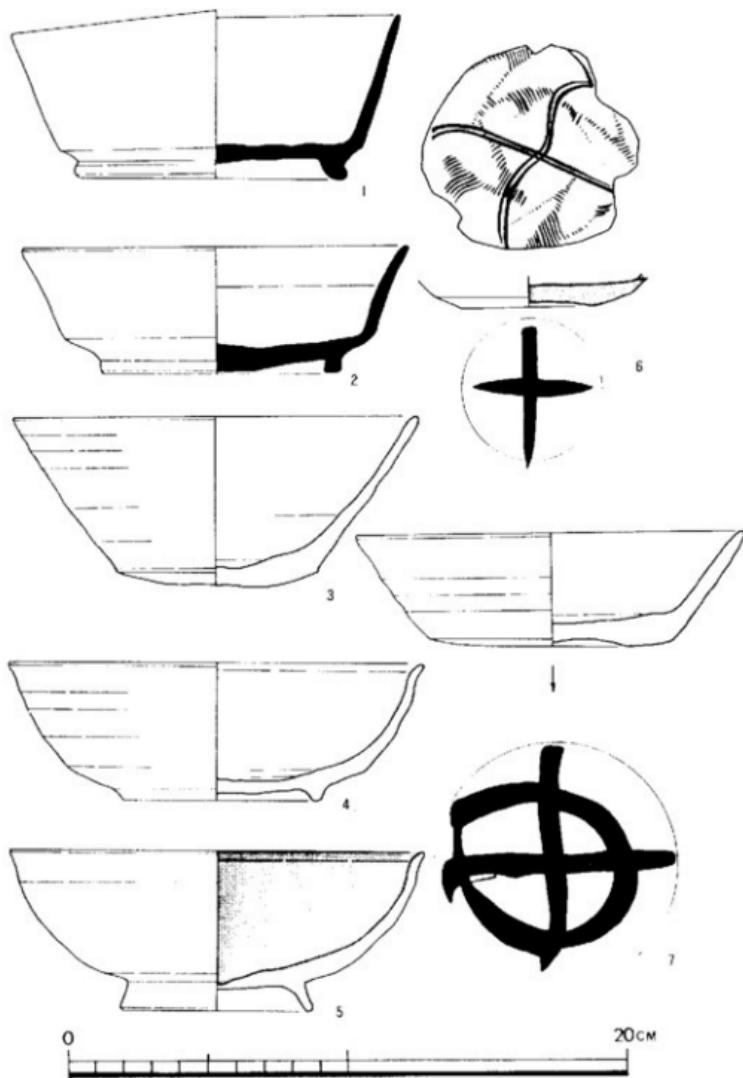


Fig.45 第1区出土器物実測図 (～5第3号溝出土、6・7第5層出土)

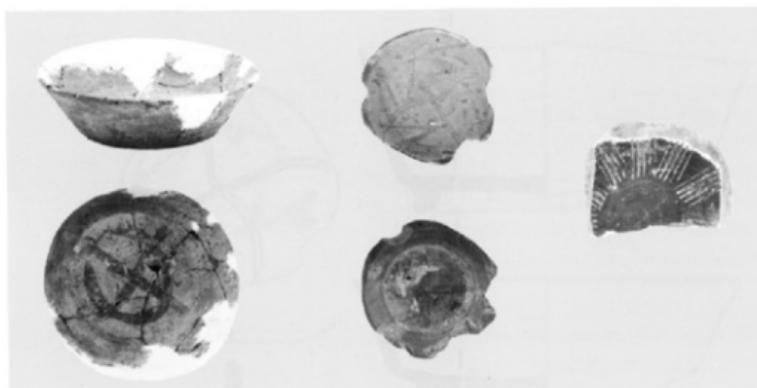


Fig.46 第5層出土遺物

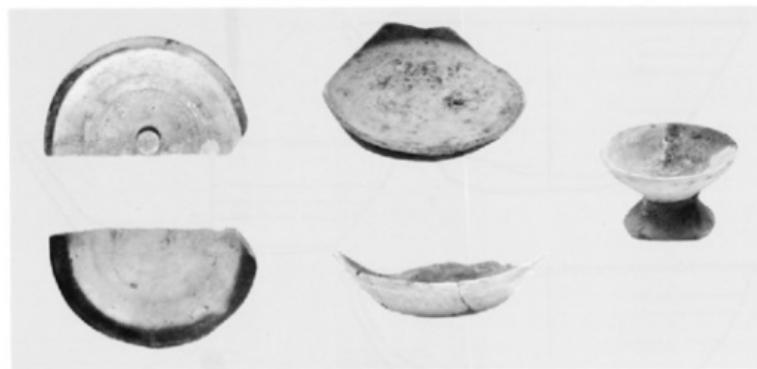


Fig.47 第6層出土遺物

第6層からは、高台付の須恵器碗・須恵器坏・坏蓋・台付手捏土器・弥生式土器・縄文時代後期前半の土器片・石鎧などが出土した (Fig.47)。

g 現代（近代？）の水田址

台地上は、中世以前の遺構は、確認できなかったが、近代から現代に至る水田址を確認した。まず、南西から北東に流路を取る巾1.3m、深さ30cmの用水があり、用水にそって巾1.8mの畦畔をかねた道がもうけられている。各水田は、用水にもうけられている堰から水を引くようになっており、水口には杭が2～3本あり、そばに肥溜（水溜？）がある。排水は、畦畔の中に土管等の暗渠があり、用水に排水するようになっている。高台は、鳥栖ロームを床土としており、堰は、木杭や竹がもちいられている。肥溜は、径1m前後の円形のものと、一辺2m前後



Fig.48 現代用水、畦畔、肥溜



Fig.49 堀及び水口（西から）



Fig.50 堀木組み状態

の方形のものがある。低地は、床土中に排水を良くするために暗渠がもうけられている。暗渠は、まず地山をU字形に掘り、中節を取り、所々に方形の穴をあけた孟宗竹をつなぎ、スサでくるみ、瓦をかぶせてある (Fig.48~53)。



Fig.51 段落ち部の現代水田瓦排水施設



Fig.52 瓦排水施設断面



Fig.53 瓦排水施設の排水口

3 第II～IV区調査区の調査

a. 第II調査区の調査

第II調査区は、調査対象地の南縁辺で、現代水田耕土下は、部分的にうすく床土があり、鳥栖ロームとなっている (Fig.54)。



Fig. 54 第II調査区全景



Fig. 55 第4号溝

遺構としては、巾2.5m前後・深さ0.4mの第4号溝が確認された。第4号溝からは、旧石器時代の三陵尖頭器（古銅輝石安山岩製）や黒曜石製の石鎌・中世土師器片などが出土した。以上から第4号溝は、中世から近世の用水と考えられるが、遺物が細片で磨滅しているところから詳細な時期は分らない。(Fig.55)。

第2調査区では、他に黒色粘質土を埋土とする半月形・円形の堅穴状のものがあるが、無遺物で、形状も不整形であり、床もしっかりしないことなどから人為的な遺構とは考えられない。

b. 第IV調査区

第IV調査区は北縁辺にあたり、現代水田耕土・床土の下はうすく鳥栖ロームが残っているところもあるが、八女粘土層となっている。第VI調査区中央部に4×8mの範囲で、黒褐色土が皿状に落ち込んだ淵状の遺構が確認された。形状は不定形で、深さは、最も深い所で70cmある。ここでは、3本の丸杭があり地山から約20cmの所から多数の杉皮や10×50cmの板状の材が出土したが、淀みに流れ込んだ状態と考えられる。出土遺物としては、夜臼式土器片・弥生式土器の細片・石鎌などが出土した。杭があることなどから、人為的な遺構と考えられるが性格は不明である。時期は弥生時代前期初頭？。



Fig.56 第IV調査区



Fig. 57 第VI調査区窓状遺構



Fig. 58 第IV調査区窓状遺構板材出土状態

第III章 まとめ

南区野多目地域は、これまで野多目古墳群があつたり、分布調査によつて、縄文式土器や須恵器・青白磁が採集されていたが、遺跡の性格等については不明であつた。

今回の発掘調査によつて、奈良時代・13~14世紀の溝状遺構や塙・櫛などの遺構が確認され、縄文時代から中世にいたる多量の遺物が出土した。以上今回の調査の成果及び、課題をまとめる。

1. 古代の溝状遺構確認される。
 2. 第3号溝から瓦類が多量に出土したことから、本遺跡または周辺地域に、瓦葺の建物群があつたことが想定される。
 3. 第3号溝の黒色粘質土から古墳時代の祭壇遺物が出土したことから、本遺跡の台地上及び周辺地域に、古墳時代の祭祀行為が行なわれた場所があることが想定される。
 4. 第3号溝から出土した内行花文鏡は、後漢の長宜子孫系の特徴をもつているが、銘が読めないことなど一概に後漢鏡とはしがたく類例をまちたい。
 5. 本調査区では確認できなかつたが第1号溝や櫛・塙などは、水田址関連遺構と考えられ、中世段階では水田として利用されていたことがわかる。
- 以上、5点の成果があつたが、野多目地区を考えるうえで、これらはすべて今後の課題といえる。本遺跡の遺構分布・遺物実測図については、来年度野多目古墳遺跡調査報告書で報告する。

福岡市
野多目前田遺跡 調査概報
福岡市埋蔵文化財調査報告書第85集

1982年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 リチューエツ福岡工場

福岡市博多区東比恵2-9-1



